

献 辞

経済学部教授 田 中 恭 子

本城昇先生は霞が関の官僚であられたが、1996年に埼玉大学経済学部へ赴任された。この時期は経済学部の第三の学科である社会環境設計学科のスタッフが充実してきて、本格的に建ち上がっていった時であった。諸事情により混乱の中で成立した経緯のある社会環境設計学科であるが、本城先生は当初からこの学科の名称をこよなく愛され、先生の理想的な教育を実践できる素晴らしい可能性を秘めた場と考えておられた。経済法が先生の契約科目であられたが、本城ゼミでは経済法を指導するばかりでなく、学生を夏休みに有機農家に泊まり込みさせ、学生が自然や人とのつながりを大切にする生き方を体験して学ばせておられた。

先生は学問的には公正取引委員会での経験から、独占禁止法、消費者問題、有機農産物の表示問題などのテーマに取り組んでこられた。法律を単なる判例・解釈として終わらせるのではなく、より良い社会に変革するためのツールとして、実践的に法律の知識を活用することを理想とし、しかも成果を上げてこられた。なかでも有機農産物の表示問題の改善や有機農業の政策・法制度のあり方について考察し、2003年に京都大学で博士論文を提出され博士号を取得され、『日本の有機農業』と題する著作を出版されたばかりでなく、日本有機農業会の役員をされ、有機農業推進法案を学会の中心になって起草された。それをベースに、2006年には、議員立法で有機農業推進法がみごとに成立に至った成果は特筆すべきことである。官僚として立法過程に係わってこられた前職の知識・経験を生かされて、日本の有機農業の普及・発展のために重要な制度的な礎石を築かれたのである。

先生はまた消費者法や消費者政策を大学で講じつつ、不公正なまたは欺瞞的な消費者取引行為に関する米国・EUなどの外国との比較研究を続けられ、2010年には『不公正な消費者取引の規制——米国・EU・韓国の法制を中心に』という本を上梓なさった。海外で消費者保護のため実効性のある法整備が進展し、管轄する行政機関の権限強化がはかられている実態を紹介したこの著作は、2009年に消費者庁が成立した日本にとって、とても時宜に適った意義深い研究である。しかも、法律の知識を社会のために活かす実践例として、たとえば、先生は有料老人ホームの消費者保護に関して経営側と消費者との間の情報の非対称性を問題とされ、有料老人ホームの表示や取引の適正化にご尽力されたと聞いている。このように、単なる法律の研究で終わるのではなく、実践・行動する方であった。

学内委員の仕事でも学生のために積極的に活動なさっておられた。90年代末には国立大学が学生の就職対策に本腰を入れなければならなくなり、本城先生はインターシップの充実、エントリーシートの書き方の講習会、学内公務員講座の開設など、就活対策にはリーダーシップを取ってこれまで取り組んでおられてきた。この面でも先生の経済学部への貢献は大きい。私は先生からゼミ生にエントリーシートを書かせる指導において、学生本人の長所や個性を見出させるように自分を語らせる手法を教えていただき、自分のゼミでも実践し、教員と学生の交わりがさらに深まるきっかけを与えていただいたことを感謝している。

退職前の最後年となる2011年度は、経済法や消費者政策の枠から出て、本来、先生が社会環境設計

学科でご自分の理想とされる教育を思う存分実践なさった1年であった。埼玉大学に近くにありながら、見沼たんぼと呼ばれる広大な緑地帯を対象とするフィールドミュージアム構想を抱いておられた大田堯先生との出会いに触発され、先生は見沼をフィールドとする多くの持ち出しの授業を精力的にこなされた。多くの見沼に関係するNPO、市民団体等の方々をゲストとして招きながら、立ち上がりつつあった見沼たんぼ地域ガイドクラブのボランティアの方々の協力を得て、学生にガイドを体験させる目的の授業を企画された。学生によって作成された紙芝居を大学周辺の保育園で実演させ、大田先生と上井学長との対談の企画・実施、環境問題をテーマとする授業では田中正造を調べ、足尾銅山までのフィールドトリップを実施するなど、さまざまな地域に根ざした教育を実践なさった。そこには普通の座学では見られない学生の生き生きとした表情や人の心と心がふれあう感動伝わる貴重な体験があった。

先生は霞が関の官僚として仕事をしておられた頃、「知識が人を支配するために使われている」エリート社会の実態に疑問を持たれた、と私にしみじみと心情を吐露なさったことがあった。知識が自己の利益や出世のために使われていて、心のゆがみと冷たさをもたらしている職場では、共感する喜びが欠けていて虚しさを感じ、官僚の世界を飛び出して大学に来られた、と。先生は幼いころ地域の子供たちの遊びのなかで、あるいはボーイスカウトの活動で心がいやされた原体験を持っておられ、今の若者に同様な体験を通して「生きることを励ます」教育を実践したいと切に望んでおられた。大学のキャンパスで落ち葉を利用したたい肥作りや、有機野菜作り、保育園での紙芝居の実演などの実践的教育は、「知識」がお互いに愛し合い、自然を大切にして、人として正しく生きるという本来の目的のために使われるべきであるという理想に根差していたのである。

「知識」をどう使うか。大学教育と何の目的のためなのか。深く、重い根本的な問いかけである。そして大学に残る私たちが先生の問いかけを真摯に継承していくことが、本城先生の16年間の本学での研究・教育面での多大な貢献に対して少しでも恩返しに繋がるのではないかと考えている。